

北海道雄武高等学校

課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 121名

1 取組の特徴

1年生の総合的な学習の時間や全校生徒におけるピア・サポート学習会を通して、ピア・サポーターを養成し、校内でのサポート活動やグループワーク、小学生との交流などにより、生徒が互いにサポートしあう環境づくりを行っている。

2 取組のねらい

幼少期から固定的な友人関係や複雑な家族関係・人間関係で悩む、自尊感情の低い生徒が多く見られることから、効果的なコミュニケーションスキルを身に付けさせたり、セルフエスティームを高めさせたりするなどして、生徒同士の理解の深化や良好な人間関係づくりを目指す。

<組織図>



3 取組の経過

4月	児童センターでのピア・サポート(月1回) ピア・サポート研修会(年間11回)	10月 11月	1年生ピア・サポートトレーニング 講師によるピア・サポート学習会(1・2年生)
5月	学級環境適応調査(アセス)の実施(全学年)		講師による教員と生徒への教育相談 小・高交流会
6月	1年生ピア・サポートトレーニング 宿泊研修でのトレーニング 保健講話でのピア・サポート	12月	講師によるピア・サポート学習会(全学年)
7月	1年生ピア・サポートトレーニング		講師による教員への教育相談
8月	1年生ピア・サポートトレーニング	2月	学級環境適応調査(アセス)の実施(1・2年生)
9月	学級環境適応調査(アセス)の実施(全学年)		

4 取組の内容

1 学級環境適応調査(アセス)の実施(5月、9月実施)
 5月と9月の調査結果からは、「教師サポート」に減少が見られた。これは、5月は中間考査前であり、考査に係る教師の指導の影響により「教師サポート」の数値が高くなっていったと考えられる。
 クラス替えない3年生について、昨年の状況(1回目は9月、2回目は2月)と比較したところ、「生活満足度」と「学習的適応感」の数値が低くなった。これは、進路実現への迷いや進路の内定状況と関係が深いのではないかとと思われる。また、昨年度に比べ、「友人サポート」、「向社会的スキル」、「非侵害的關係」の数値が上昇した。
 「友人サポート」は、5クラス中3クラスで数値の上昇が見られた。また、「非侵害的關係」の数値は1クラスを除いて上昇した。これらは、高校生ステップアップ・プログラムの取組の成果であると考えられる。

4 取組の内容

2 ピア・サポート学習会(11月14日実施)

- ねらい
「人間関係のストローク」の学習
- 対象
1・2年生
- 内容
スライドにより、投影した画像を見せ、人によって見方が違うことを確認した。その後、グループで「相談できそうな人の特徴」について意見を出し合い、まとめ、発表した。さらに、「足し算トーク」のゲーム体験を通し、話し手は自己主張するために聞き手の顔を見て明確に発言し、聞き手は話し手の顔を見ながら共感したらうなずくなど、話の上手な仕方や聴き方を学んだ。
- 成果等
生徒は真剣に取り組んでいた。特に2年生は昨年よりも積極的に取り組む姿勢が見られた。また、各班に配置したピア・サポーターが率先して話を引き出すことができるようになり、以前より集団で学習を進めようという雰囲気が見られるようになった。
- 生徒の感想
・自分が話すときに気を付けるべきこと、相手の話を聴くときに気を付けるべきことを考える機会になりました。
・他人と話すときに気を付けることは、目を合わせてしゃべることだけかと思っていましたが、他にもいろいろなことが必要だということが分かりました。



3 ピア・サポート学習会(12月12日実施)

- ねらい
相手に気持ちや意見を伝えるための技法の学習
- 対象
全校生徒
- 内容
アサーション・トレーニングの歴史について学習し、学年縦割りのグループをつくり、ゲームをした。3つのタイプの自己表現(ノン・アサーティブ、アグレッシブ、アサーティブ)を「ドラえもん」の登場人物に例えて学んだ。演習ではグループ討議を実施し、掃除をサボった人に対して言い方を変えることにより、相手の対応に違いがあることを学んだ。また、アサーティブな自己表現の例をDESC法(D=describe:描写、E=express, explain, empathize:表現する、説明する、共感する、S=specify:提案する、C=choose:選択する)を用いて確認した。
- 成果等
全学年の縦割りのグループ編成により学年を越えたコミュニケーションが生まれた。また、生徒は他人や後輩を思いやる言動の難しさを感じており、アサーティブな自己表現は社会で必要なことと認識できた。
- 生徒の感想
コミュニケーションの仕方などを学びました。これは人生の中で役に立つことだと思います。断り方一つで相手の受け取り方が変わるのだと思いました。



5 次年度に向けて

- 成果
学級環境適応調査の結果を分析すると、1回目に比べ2回目は、「友人サポート」、「向社会的スキル」、「非侵害的關係」の数値に上昇が見られた。また、生徒個々の結果を全職員が確認することによって、日常の関わりや面談、HR指導で活用することができた。
ピア・サポートトレーニングの感想やピア・サポート活動の様子から、「相手の立場になった言動を考える」、「日常的にピア・サポート活動を実践する」といった、生徒の意識変化が認められた。
- 課題
研究指定終了後も継続的な取組を行うための校内体制を構築する必要がある。
- 次年度に向けて
学校環境適応調査を継続し、調査結果について共通理解を図り、組織的な支援を必要とする生徒への支援の在り方を検討する材料とする。
ピア・サポート活動については、小学校との交流のみならず、中学校や他の高校との交流に拡大する。